

# ライマンの日本語研究

鈴木 豊

〔キーワード〕 B.S.ライマン 非連濁規則 ライマンの法則 連濁の起源 濁音

## 要 旨

ライマン (Benjamin Smith Lyman) はお雇い外国人として来日し、主に北海道開拓に貢献したが、1894年に発表した日本語の連濁に関する論文が小倉進平の翻訳・紹介により広く知られ、そこで指摘された非連濁規則が後に「ライマンの法則」と呼ばれるようになり、その呼称は現在では日本語研究者のみならず言語研究一般に通用する術語としての資格を備えるに至っている。そのライマンの日本語研究の背景 (動機・目的) について、ライマンの日本語学習の方法、日本語研究のために依拠した文献、特に日本語研究のテーマとしてライマンが連濁研究を行うに至った経緯等から考察した。1883年の口頭発表の記録であるライマン (1885) については全文の翻刻と翻訳を行い、連濁の起源に関する説について特に詳しく考察した。ライマンの日本語研究に関する考察を通じ、地質学者として来日したお雇い外国人の一人であったライマンが日本語研究を行い、かつその連濁に関する研究が緻密で高水準であったのは、ライマンの生まれ育った環境や受けた教育が、彼の言語研究に必要な資質を来日以前に十分に育んでいたことによるところが大きいということも明らかになった。

## [1] はじめに

ライマン (Benjamin Smith Lyman) の日本語研究としては1894年に発表された連濁に関するものが小倉進平 (1910) の紹介によってよく知られているが、その英文の原文とライマンのその他の日本語研究は屋名池誠 (1991) によって紹介されるまでまったく日本語研究者に知られていなかった。小論では屋名池誠 (1991) を補足する形で、ライマンの初めての日本語に関する研究であり、日本語の発音と正書法について記すライマン (1878)、ライマン (1894) の基となった口頭発表 (1883) とその記録であるライマン (1885)、日本語の動詞に関する研究であるライマン (1912) について紹介と若干の考察を試みつつ、ライマンの連濁研究の動機と目的、また結果として彼が優れた研究をなしえた理由を明らかにしたい。いずれについても屋名池論文との重複はできる限り避け、ライマンに関する新しい情報を盛り込むように努めた。

屋名池誠（1991）以降に公表されたライマンに関する研究のうち、副見恭子（1990-2006）・藤田文子（1994）・Fumiko Fujita（1994）はライマンの残した、あるいはライマンについて記された膨大な資料を丹念に調査し、新たな事実を掘り起こした点で非常に価値がある。また、北海道開拓記念館（1996）はマサチューセッツ大学所蔵のライマン・コレクションの図録と解説であり、ライマン研究にとって有益である。小論の記述はこれらの研究に負うところが大きい。

## [ 2 ] 公刊されたライマンの日本語研究

ライマンは明治6年（1873）に北海道開拓使の招きで来日した。その直後から日本語を積極的に学習し、日本語を習得していったことは桑田権平（1937）・副見恭子（1995）等に記されている。ライマンの日本語研究のうち、公刊されたものは以下の1)～4)の4種類であると思われる。屋名池誠（1991）が紹介したライマン（1878）（1894）（1912）はいずれも横浜開港資料館所蔵のもので、ライマン自身が発注して制作したと思われるリプリントを、日本のものさしに関する論文一編（“An Old Japanese Foot Measure” PHILADELPHIA 1890）とともに合綴したものであり、表紙には“BENJAMIN SMITH LYMAN PANPHLETS”と記されており、ブルーム・コレクションの一つである（資料請求番号はBULM D.VI.15）。屋名池誠（1991）によれば「ブルーム・コレクションは横浜生まれのフランス系アメリカ人 Paul C. Blum（1898-1981）の旧蔵書で外国人著作の日本関係文献の一大コレクション」である。

- 1) Benjamin Smith Lyman (1878) “Notes on Japanese Grammar”, Japan Weekly Mail, January 12th ※別刷りの表紙にはタイトルと著者名に加えて YOKOHAMA: PRINTED AT THE “JAPAN MAIL” OFFICE とある。
- 2) Benjamin Smith Lyman (1885) “On the Japanese Nigori of Composition”, Proceedings at Boston, May, 1883, *Journal of the American Oriental Society* 11, pp.cxliv-cxliii, American Oriental Society
- 3) Benjamin Smith Lyman (1894) “The Change from Surd to Sonant in Japanese Compounds”, *Oriental Studies A SELECTION OF THE PAPERS READ BEFORE The Oriental Club of Philadelphia 1888~1894*, pp.160-176, BOSTON GIN & COMPANY ※別刷り1ページ最下段に表紙にはタイトルと著者名に加えて From the “Oriental Studies” of the Oriental Club of Philadelphia 1894とある。ノンブルは pp.1-17。
- 4) Benjamin Smith Lyman (1912) “The Nature of the Japanese Verb, So-Called” ※別刷り1ページ最下段に Reprinted from Proceedings American Philosophical Society Vol. li, 1912とある。

3) のライマン（1894）について屋名池氏は「横浜開港資料館ブルーム・コレクション所蔵のものが私の知る限りでは唯一の存在である」とされたが、ライマン（1894）を収載する *Oriental Studies A SELECTION OF THE PAPERS READ BEFORE The Oriental Club*

of Philadelphia 1888~1894 は国立国会図書館に所蔵されており、また静岡県立大学附属図書館に別刷りが所蔵されている。後者はアメリカコーネル大学所蔵本のコピーを製本したもので、原本は横浜開港資料館のものと同じく別刷りである。国会図書館蔵本と別刷りはまったく同じに組まれている。なお、北海道開拓記念館（1996）に1) の Benjamin Smith Lyman (1878) の原稿の写真一葉が載せられている（目録ナンバー433 1977~1978執筆）。ライマンは来日して4年目にして日本語に関する論文を執筆していたのである。

### [ 3 ] 明治初期の外国人による日本語研究

[3.1] 明治初期の外国人による日本語研究 ライマンが帰国する明治13年（1880）までに外国人によって種々の日本語に関する研究書が著されていた。ライマンは『和英語林集成』第二版を中心資料として日本語の連濁研究を行うことができた。また、ライマンの蔵書の中にも外国人による日本語研究書が含まれている（[3.3] 参照）。それらを国語学会編（1980）『国語学大

〈表1〉 西洋人による日本語研究（1826~1883）

---

1826	シーボルト『日本語要略』刊。
1830	メドハースト『英和和英語彙集』刊。
1857	ボルラー『日本語ウラルアルタイ語族所属の論証』刊。 クルチュース『日本語文典例証』刊。
1860	J. Liggins <i>Familiar Phrases in English and Romanized Japanese</i>
1861	オールコック『初学用日本文要説』刊。
1862	バジェス『日仏辞書』第一分冊刊。
1863	ブラウン『英和俗語典』刊。 ロニー『日本文集』刊。 R. Alcock <i>Familiar Dialogues in Japanese with English and French Translations for the Use of Students</i>
1865	ロニー『和法会話対訳』刊。
1867	★ホフマン『日本文典』刊。 ★ヘボン『和英語林集成』初版刊。1872年第二版，1886年第三版。 J. F. Lowder <i>Conversations in Japanese and English</i>
1868	★バジェス訳『日仏辞書』。
1869	アストン『日本口語小文典』刊。
1872	★W. G. Aston <i>A Grammar of the Japanese Written Language, with a short Chrestomathy</i>
1873	★E. Satow <i>Kuawaiwa-Hen, Twenty-five Exercises in the Yedo Colloquial, for the Use of Students, with Notes</i>
1875	E. Satow & Ishibashi Masakata <i>A English-Japanese Dictionary of the Spoken Language</i> S. R. Brown <i>Prendergast's Mastery System, adapted to the study of Japanese or English</i>
1878	★ディキンズ・サトウ「1878年八丈訪問記」（Transactions of the Asiatic Society of Japan）
1885	チャンブレン「日本語のいわゆる語根について」（『日本アジア協会会報』） ロニー『日本語文法とトルコ語文法との比較研究』刊。
1888	チャンブレン『日本口語文典』刊。
1889	バチェラー『アイヌ英和对訳辞書』刊。

---

辞典』付録の「国語年表」や佐藤喜代治編（1977）『国語学研究事典』付録の「国語史年表」等によって、1826年からライマンが連濁について講演する1883年までに限って示せば〈表1〉のとおりである。ライマンの蔵書に含まれていることが判明しているものについては著者名の前に★印を付した。

明治以降漢字廃止運動としての日本語のローマ字化をめざす活動が盛んになり、1885年には羅馬字会が、1905年にはローマ字ひろめ会が設立された。J. C. ヘボン『和英語林集成』も第二版から羅馬字会の提唱する綴りを採用した。ライマンの日本語研究（特にローマ字による日本語の正書法についての研究）もこれらの先行研究に大きな影響を受けたと推測される。

**[3.2] ライマン家と B. S. ライマン** 副見恭子（1995）によればライマン家はたいへんな名家で、「ベンジャミン・スミス・ライマンが出生した1853年頃は、教養と文化の最たる旧家として知れ渡っていた」ようである。ライマンは文化人を多く輩出したライマン家の環境の中で勉学に励み、名門校フィリップ・エクセター高校に進学し、ハーバード大学で法学を学んだ。大学卒業後「親友サンバーンが、ラルフ・エマーソンの提案で開いたコンコードの学校で教べんをとった」が、地質学者の伯父 J. P. レスリーの影響を受け、パリとドイツの鉱山学校に留学して鉱物学などを学んだ。その後地質調査のためにカナダやインドを訪れている。以上の経歴からライマンがすぐれた知性と広い教養をもち、さらに外国語に堪能であったことを知ることができる。

**[3.3] ライマンの日本語学習** 副見恭子（1995）によれば「一八七三年（明治六年）、三十代の働き盛りのライマンは未知の国に「眠れる美女」の日本を知ろう、助けようと、情熱に燃えて来日した。江戸に到着すると早速、ヘボン辞書、簡易会話辞典、松本英和辞典、ブラウンの日本文法の四冊を注文した」ほど日本語の学習に熱心だったし、「一八七四年（明治七年）蝦夷地質調査の折、根室で病んだライマンが、休養中に江戸英国公使館宛で、当時の日本語の大御所、W・G・アストンへ書いた手紙が、フィラデルフィアの米国哲学協会にある。ヒンズー、ラテン、ギリシャ語を引用して日本語について述べている内容は堂々たる言語学者ベンジャミン・スミス・ライマンの印象を受けた」ことから、日本語研究の素養は十分であったことが知られる。副見恭子（1992）（「ライマン雑記（6）」）によればライマンの伯父ピーター・レスリーは地質学の手ほどきをしたことを始めとしてライマンに大きな影響を与えたが、彼の趣味は「言語学とエジプト学」だったという。言語学的な素養が十分なライマンが熱心に日本語を学習した結果、彼の日本語は急速に上達したようである。ライマンは日本人への手紙は平仮名を用いて書いているが、日本の書籍を数多く所持していたこと、印鑑に「來曼」の字を用いていることなどから、漢字もある程度読めたと推測される。

**[3.4] ライマンの蔵書** 桑田権平（1937）、副見恭子（1995）、鈴木尉元・児玉喜三郎（1990）などによってライマンの蔵書の全貌についてそのおおよそを知ることができる。副見恭子（1995）によれば1921年、ライマンの蔵書がノーサンプトンのフォーブス図書館に寄贈されたときに、ニューヨーク州立図書館から派遣された司書のミス・ビューラー・ベエリーを責任

者としてそれらは分類・整理された。書籍4105点のうちの「2000点以上の和漢目録をマサチューセッツ農科大学助教授・板野新夫とアマースト大学学生，川久順が受け持った」というが，目録は未見である。鈴木尉元・児玉喜三郎（1990）の報告によればライマンの旧蔵書は「蔵書票を付され，同図書館の蔵書の中に散在していて，現在では一括したものとしてみるができないのが残念であった」ということである。桑田権平（1937：pp.28-32）によればライマンは以下のような書物を所持していた。Gonpei Kuwata（1937）ではほぼ同じものがpp.22-26に掲出されている。以下にそのまま引用して示す。

一八六一年から一九〇七年に至るまで，先生の筆に成った報告書及び論文は其数百五十余に上り，其内四十三は地質学，二十一が測量，二十三が地理，十九が理科，十一が教育，旅行記，工業，語学，哲学其他自然科学に関するもので，其約三分の一は題材を日本に取ってゐる。

茲に先生の蔵書名の或ものを抄録する。以て先生の読書趣味と研究の事跡とを見るのは興味あることと思ふ。

Monier William's Practical grammar Sanskrit language.

William Yates's Dictionary in Sanskrit and English.

Horace Wilson, "Sanskrit and English dictionary."

W. Mortin's Dictionary on Bengali language.

Duncan Forbes, "Hindustani grammar and manual."

Nathaniel Brice's Dictionary.

Kalidase, "The Literature of India."

Tagore, "Tatwavidya Sarman's Hitopadosa."

Hamumat, Bengali proverbs.

J. N. Cushing's Grammar and handbook of Shan language.

Alexander Koros, "Grammar and dictionary Thibetan language."

P. E. Foncaux, "Grammar de la language Thibetaine."

以上に徴しても先生の印度，チベットの文学と語学にも通曉してゐたことが明かである。日本に関する書籍は，辞書，文法，歴史，地理，其他文学物であつて，辞書，文法の部では最も珍しき左の図書を含んでゐる。

W. G. Aston, "Grammar of the Japanese written language."

P. Rodriguez, "Elements de la grammaire Japonaise."

J. J. Hoffman, "Japanese grammar."

E. M. Satow, "Dictionary Japanese and English."

Leon Pages's Dictionary Japanese and French.

M. Shibata, "Dictionary Japanese English."

Leon de Rosny, "On Orient." 1865.

Charlevoix, “Histoire et description generale du Japon.”

J. H. Klaproth, “Nippon O Dai Itsi Ran.” 1834.

Engalbert Kaemfer, “History of Japan.”

Bernard Verenius, “Descriptive Regni Japonise.” 1673.

Phillip Siebold, “Bibliotheca Japonica.” “Flora of Japan.” “Fauna of Japan.”

Transactions of “The Asiatic society of Japan.”

Journals of “The American Oriental Society.”

French edition of “Itsi Saikio.”

Ishibashi Masakata’s Treaties with America. 1876

東洋就中日本の文学書及び美術書には木版刷り古本少からず、徒然草の全部は其の尤なるもので、何れも貴重なる蒐集と云ふべきである。画譜及び書画等許多あり。最も北斎の版画に富み書画には象山のもの多し。先生の日本趣味に深かつたことは勿論、独り語学のみならず文字に通じ、其名の来曼の字は、先生の好んで用ひたところのもので、其を印刻さへ為れてゐる程で、本書の扉に載せて置いたものがそれである。

マサチューセッツ大学図書館所蔵のライマン・コレクションについては鈴木尉元・児玉喜三郎(1990)、副見恭子(1995)に紹介があり、その大略を知ることができる。副見恭子(1995)はライマンの蔵書について「ライマン・コレクションの内容は、書籍四千百五、絵画二百九十九、地図七十四」であり、そのうち言語に分類されるものは273あり、「節用集」「字海」「會王大全」や、浪速で安永九年に印刷した「康熙字典」など、それにアストン、ホフマン、サトウ、シーボルトなどの日本語に関する本が多い。さすが言語に興味を持ったライマンの蔵書と感心する」と記す。

#### [ 4 ] ライマンの日本語研究

[ 4.1 ] 研究の動機 ライマンの教養と言語学的素養については [ 3 ] に記したとおりである。ライマンの日本語研究の直接の動機はライマンの日本に対する興味と愛着にあるといえよう。来日前から未知の国日本に興味を持ち、来日とともに日本語学習に励み、離日後もなお日本に愛着を示し、終生多くの弟子を含む日本人と交流を持った。ライマンの日本趣味についてはモース『日本その日その日』(平凡社東洋文庫による)に「先晩我々は、政府のために蝦夷の地質測量をしたドクタア・ベンジャミン・スミス・ライマンに、正餐に呼ばれた。彼は美しい衝立や、青銅細工や、磁器や、その他が充満した、日本家に住んでいる。お客様もあり、我々は六人のコト(即ち<sup>ハープ</sup>琴)演奏者と、一人の琵琶演奏者とによつてもてなされた」等の記述からも知ることができる。ライマンの書齋の様子は副見恭子(1991) (「ライマン雑記(4)」) 所載の写真からもよくうかがうことができる。

ライマンが生涯独身だったこと、日本人の養子を持ったことも日本への関心を断ち切らせな

かった原因の一つだろう。ライマンは独身主義者であったわけではなく、来日してまもなく日本人女性に求婚したことがある。森本貞子（2003）等によれば、明治7年（1874）ライマンは自ら教鞭をとっていた開拓使仮学校の女生徒であった広瀬常との結婚を開拓使に申し入れた。しかし紆余曲折を経て常は後の文部大臣森有礼と結婚した。この間の経緯に関しては種々の記録が残されており、ライマンは関係者の対応に不満を持ち、怒りをあらわにしている。森有礼と広瀬常の結婚は福沢諭吉を証人とする日本初の契約結婚として当時の新聞等にも報道された。その後明治19年に離婚、その理由については当時からいろいろ取りざたされてきた（青い目の子を産んだなど）がその真相は不明であり、離婚後の常についても不明であった（精神に異常を来たして死んだなどの噂があった）。しかし森本貞子（2003）によれば、常は自由民権家となった義弟広瀬重雄が関わった静岡事件（政府により隠蔽工作が行われたとされる）のために夫森有礼の立場を慮り、離婚を余儀なくされたという。森本氏は、旧旗本の娘であった常は旧幕臣の榎本武揚らの助力と勧めでまず明治19年ひそかにハワイに渡り、その後「モリ・イガ」の偽名でアメリカに渡りサンフランシスコのクーパー・カレッジ（現在のスタンフォード大学医学部）に入学、偽名のまま卒業し、さらに英国スコットランドのグラスゴー大学で医学を修得したと推定している。この推定の根拠は「同大には現在も日本人女性「モリ・イガ」の学籍簿が保管されている。そこに記されている「モリ・イガ」の日本での住所は「東京芝浜松町」となっており、この住所は開拓使女学校時代の親友福島輝の住所である」ことにある。森有礼は常と離婚後、伊藤博文の勧めで岩倉具視の娘岩倉寛子と再婚、明治22年帝国憲法発布記念式典の日の朝、黒住教信者西野文太郎により腹部を刺され翌日絶命した。

ライマンが日本を去ることになったのはドイツ人の地質学者ナウマンとの争いに破れてのこととされる。国立の地質研究所の構想を抱いていたライマンは日本政府との契約が切れた後も日本にとどまっていたが、ナウマンの意見を取り入れて地質調査所が設立されることになったため、帰国する決心をした。ライマンとナウマンの関係については佐藤博之（1985）に詳しい。副見恭子（1993）によれば「明治13年（1880）12月22日、ライマンは、上海行き Tokio Maru で、多くの日本人と別れを惜しみながら横浜を發」ち、上海・インド・フランス経由で1881年「5月16日にニューヨークに到着、19日に故郷ノースハンプトンに戻った」。そして「帰郷した翌日からライマンは、中国語とイタリー語の勉強を始め、学究生活に戻り、「ライマンは、帰国後1881年から1885年の間に、地図、報告書、論文を次々に出版した」。アメリカ東洋学会（American Oriental Society）での日本語の連濁に関する発表も1883年である。ライマンはその学会において中国語の発音についての発表（On Certain Sounds in Peking Pronunciation of Chinese）も行っている。アメリカ東洋学会には1871年入会、1920年の死去まで終身会員だった（1921年発行の第40号まで名簿に名を連ねている）。第33号の記録によればライマンは1913年のフィラデルフィアでの会合に出席している。会合の出席者は56人であった。なお記録上その他の回のアメリカ東洋学会へのライマンの参加はなく、論文も掲載されていない。屋名池誠（1991）によればライマンはそのほかにも多くの学会に所属していた。なかでも

アメリカ哲学協会はベンジャミン・フランクリンの創立で、ライマンの伯父のピーター・レスリーが司書や幹事を長らく務めていた（副見恭子（1992）＝「ライマン雑記（6）」による）こともあり、後にライマンの蔵書の一部を所蔵することになった。

**[4.2] 研究の目的** 屋名池誠（1991）はライマン（1878）（1912）（1915）を検討し、ライマンの語学研究には「正書法への関心」と「語源や原初的構文法への関心」の二系列があり、連濁研究は「ライマンの関心が第1の系列から第2の系列に移ってゆくかなめの位置にあり、ライマンの語学研究の特質をもっともよくあらわして」おり、「日本語の表記に関する種々の困難を救うためには表音主義の表記の採用が最善と信じたライマンにとって、ローマ字正書法を確立し表記を安定させるためには、まず連濁、不連濁の規則性をあきらかにしなければならなかったのである」とする。

ライマンの日本語研究に影響を与えた先行研究にはどのようなものがあるのだろうか。ライマンの著作の中から参考文献として書名が記されているものを見ると、ライマン（1878）では I PRONUNCIATION 中の日本語の母音に関して Samuel Porter（1866）の “vowel elements in speech”, *Silliman's Journal*, XLII. 176. があり、また、日本語のアクセントに関する記述の箇所と、II ORTHOGRAPHY の日本語のローマ字綴りについて述べる部分でヘボン（Dr. Hepburn）の名をあげている。ライマン（1912）ではフンボルト Wm. von Humbolt, オヤングレン Oyanguren's *Japanese Grammar*, P.ロドリゲス（1826）*Elements de la Grammaire Japonaise*（引用あり）があげられている。ライマンが当時の日本語研究書に目を通していたことは [3.1] で触れた。

## **[5] ライマンの連濁研究**

**[5.1] 連濁研究とライマンの法則** 現在日本語学や言語学の分野で日本語の連濁現象に関する研究は盛んで、論文の生産数もお増加傾向にある。その長い歴史をもつ連濁研究にあって、ライマンの指摘した「後部成素中に濁音がすでに存在する場合は連濁しない」という非連濁規則は後に「ライマンの法則」と呼ばれるようになり、研究史上最も重要な規則として広く研究者の間に知られている。つまり、ライマンの日本語研究のうち、連濁に関するライマン（1894）だけが後の日本語研究に大きな影響をもつことになったのである。なお、複合語の後部成素に濁音が含まれると連濁が起らないという事実は賀茂真淵や本居宣長によって指摘されていたが（鈴木豊（2005）参照）、ライマン（1894）は日本語の連濁についての最初の論文であること（それ以前の研究は連濁に言及するにとどまる）、『和英語林集成』を中心資料とした実証的・網羅的研究であること、非連濁規則を四つ立てたこと、連濁の起源について考察したことなどにおいて画期的業績であるといえる。ライマンの連濁研究が日本の研究者にいかを受容されたかについては鈴木豊（2007予定）を参照していただきたい。

**[5.2] 連濁研究の動機** ライマン（1883）（1894）では「連濁」という用語を使用していない（ライマン（1883）では日本語の濁音を *nigori*、ライマン（1894）では *sonant* の用語で示す）

こと、論文中に先行研究について触れるところがないので、ライマンは独自に連濁の研究に取り組んだと考えられる。連濁研究の動機については屋名池誠（1991）に指摘するとおり、ローマ字による日本語の正書法の確立のための基礎研究に求めることができよう。また、ライマン（1885）（1894）の中心資料となったのはヘボン著『和英語林集成』第二版（1872年刊）である。日本に来てすぐに買い求めたこのすぐれた辞書は、見出しの日本語がローマ字表記されかつABC順に配列されていることでライマンの連濁研究を可能にしたといえよう。

[5.3] **ライマン（1885）について** ライマン（1885）は1883年のボストンでのアメリカ東洋学会の発表記録である。ライマンが執筆したものではないが、ライマンの発表を忠実に記録している。ライマン（1894）の元になった発表であり、連濁研究史上の重要度は高いと考える。そこで以下に全文を翻刻し、その翻訳を示すことにする。

Proceedings at Boston, May, 1883.

*Journal of the American Oriental Society* 11

The American Oriental Society

pp.cxliv-cxlv

### 3. On the Japanese Nigori of Composition, by Mr. B. S. Lyman, of Northampton, Mass.

The most common phonetic change found in Japanese, Mr. Lyman said, is that of the *nigori* at the beginning of the second part of compound words: that is, the change of the initial from surd to sonant. The word *nigori* means ‘turbid,’ the Japanese regarding a sonant as merely a modification of the corresponding surd. They even hold that all the sonants in the language are derived from surds; and there are circumstances which give a certain support to this view. The change of *nigori* is not merely euphonic and to be made or not at will, but has to do with the meaning also, and is obligatory.

The rule is, that the second part of a compound takes the *nigori*: i.e. its initial, if *ch*, *f*, *h*, *k*, *s*, *sh*, or *t*, is changed to the corresponding sonant. But the rule does not apply, 1. when *b*, *d*, *g*, *j*, *p*, or *z* already occurs anywhere in the second part of the compound; 2. when the second part is a Chinese word; or 3. when the word (though given by Hepburn as a compound) is really made up of words in regular grammatical construction, without ellipsis — such as juxtaposed verbal forms, Chinese words followed by verbal forms denoting doing or action (*shi*, *suru*, and the like), or words connected by *no* or followed by *to* or *te* or any of the syllables used as terminations of verbal forms; and 4. there are 1002 other cases where the *nigori* is not taken, against over 2200 where it is taken (one in three). Full lists of the words had in view in<sup>(1)</sup> these rules and exceptions were presented with the

paper; they are based on a review of all the words in Hepburn's dictionary, and some hundreds more, or about 23,000 words in all.

If the complete lists of compounds with the *nigori* and without it be carefully examined, it will be found that the change is not made when the first part indicates source or cause, possession, superiority, or pervasion or inclusion of the second part — in short, domination over it as a subordinate thing; and these are the qualities possessed in English by a substantive following the word *of*, as compared with one that precedes. But when those qualities are rather possessed by the second part of the compound, of which the first part indicates a subordinate or partial or occasional characteristic, the *nigori* is taken.

It is clear that the *nigori* arises from the disappearance of a sonant consonant — almost always an *n*, and generally the word *no*, 'of,' but sometimes *ni* 'in, to,' sometimes the negative *n*, and sometimes other sonants or syllables, as *de*, 'at' or 'with.' It can be hence understood why the sound *n* is so often heard in Japanese before a dental *nigori*, and *m* before a labial one, and still oftener *ng* instead of simple *g*. The significance of such sounds is a strong argument for specially marking them in any system of transliteration: for writing, say, *Nangasaki*, in the time-honored European way, instead of *Nagasaki*.

The rule of *nigori* in composition helps much toward tracing the derivation and meaning of many Japanese words. For example, *nigori* itself, apparently from *ni-ru*, 'resembling,' and *kuro*, 'black;' *hidari*, 'left hand,' is *hi no de ari*, 'direction of the sunrise,' as *migi* (in the country often *migiri*), 'right,' is *mi no kiri*, 'the direction of the cutting off of sight.' It is interesting to see that these words of direction come from the ordinary and favorite southern outlook of houses in that climate.

Mr. Lyman closed with calling attention to the general interest and importance of grammatical investigations of this kind, which are too much neglected, because scholars are so much taken up with translation and interpretation.

講演集録（ボストン，1883年5月）

『アメリカ東洋学会会報』11号 アメリカ東洋学会 pp.117-118

### 3. 日本語の複合語のニゴリについて B.S.ライマン氏 マサチューセッツ州ノーサンプトン在住

ライマン氏によれば，日本語に見られる最も一般的な音韻交替は，複合語の第二要素の頭のニゴリである。すなわち，頭音の無声音から有声音への交替である。ニゴリという語は *turbid* (濁った) という意味であり，日本人は有声音をそれに対応する無声音の単なる変化形と見

なしている。彼らはそれどころか日本語のすべての有声音が無声音に由来すると考えており、そしてその考え方をある程度裏付ける事実も存在する。ニゴリの変化は単に音調を整えるためになされたり、自由に行ったりするものではなく、意味とともに取り扱われなければならない、義務的なものである。

基本的には複合語の第二要素はニゴリの形をとる。たとえばそれらの語の頭音がもし ch, f, h, k, s, sh, t のいずれかであれば対応する有声音と交替する。しかしこの規則は以下の場合には適応されない。1. b, d, g, j, p, z のいずれかがすでに複合語の第二要素のどこかに存在する場合。2. 第二要素が漢語である場合、または 3. その語（ヘボンによって複合語と規定されたものであるが）が、実は通常の文法的構成により成り立って、省略のない場合、たとえば動詞が並列する形や、することや行為を示す動詞語形（シ、スルなど）が次に来る漢語や、ノによって結合されるか動詞語形の語尾として使用されたトやテその他の音節が次に来る語である場合。4. そのほかに1002語のニゴリが起こらない場合があるが、ニゴリが起こる2200語以上と比較すると3語に1語ということになる。これらの規則に該当する語と例外の完全な一覧表は論文とともに示された。それらはヘボンの辞書中のすべての語とさらに数百語以上を足した、約23000語の再検討に基づいている。

もしニゴリの起こる複合語とニゴリの起こらない複合語の完全な一覧表が注意深く検討されたならば、第一要素が第二要素の原因か理由、所有、優越、浸透か包含——手短かに言えば、従属的なものとして支配している場合、交替は起こらないことが明らかになるだろう。これらは英語では of の次にくる名詞相当語句と of に先行する語句との関係に見られる性質である。しかしこれらの性質が逆に、複合語の第二要素によって所有され、第一要素が従属的または部分的または特別な性質を示す場合に、ニゴリが起こるのである。

ニゴリが有声音の消失——ほとんどいつも n, つまり一般的には of の意味のノだが時には in や to の意味のニ、否定の n, at または with の意味のデのような他の有声音や音節——から起こることは明らかである。このことからなぜ日本語でしばしば歯音のニゴリの前で n の音が、また唇音のニゴリの前で m が聞こえるのか、そしてさらにしばしば g に替わって ng が聞こえるのかが理解できる。そのような音の重要性は特にそれらを音訳する際に大きな論点となる。たとえば由緒あるヨーロッパ式に、Nagasaki の代わりに Nangasaki と書くなど。

語の複合法におけるニゴリの規則は語源や意味を明らかにするのにたいへん役に立つ。たとえばニゴリ自身は明らかにニル（似る）とクロ（黒）から成り、ミギ（右、田舎ではしばしばミギリ）がミノキリ（視界を遮る方向）であるのに対して、ヒダリはヒノデアリ（日の出の方向）である。これらの方位を示す語が、日本の風土の中で家々が通常南面し、それが好まれることに由来することが見てとれ、興味深い。

ライマン氏は、学者たちが翻訳や解釈にかまけ、そのためになおざりにされてきた、この種の文法的な調査の重要性を強調し、全般的な関心を喚起して話を締めくくった。

[5.4] ライマン (1885) とライマン (1894) との関係について ライマン (1885) と (1894) の相違としてまずタイトルの変更がある。日本語の濁音を表す語を nigori から sonant (有声音) へと変更している。連濁現象を分析的に示し、かつ英文として理解できるように変更したものである。タイトル以外の最も大きな相違点はライマン (1885) には語例がまったくあげられていないことである。ただし、ライマン (1885) の中にそれらの語例が「完全な一覧表」として示されたことが記されている。語例以外の説明は両者のほとんどが共通である。両者の間で相違する部分は屋名池誠 (1991) 訳注にすべて記されている。ライマン (1885) で省略されている部分はすべてがライマン (1894) で増補されたというわけではなく、一定の分量に収めるために記録者により省略されたものも多いと考えられる。

法則の第1則に半濁音を入れることはライマン (1885) と (1894) に共通する。ライマン (1894) では後部成素に p 音を含む連濁の例として雨合羽 (アマガッパ) をあげている。「半濁音」という日本語の呼称によって p 音を濁音の一種と考えたのかもしれない。

[5.5] 濁音二次的発生説の研究小史 上記ライマンの連濁研究では、連濁の起源を助詞・助動詞の「の」「に」「で」の音節の脱落に求めるが、それはライマン自身も記しているように濁音が清音の転じたものである (本来のものではない、二次的なものである) という説に影響を受けてのことと考えられる。この濁音二次的発生説は江戸時代以来広く認められていた説である。以下にその研究史を略述する。

本居宣長 (1785) 『漢字三音考』には「濁音ハタゞ清音ノ變ニシテ。モトヨリ別ナル者ニ非ル故ニ。皇國ノ正音ニハ。是ヲ別ニハ立ズ。清音に攝スルモノ也」(『本居宣長全集 第五巻』1970年、筑摩書房による) とあり、以下に記すように当時の国学者は濁音は清音の転じたものと考えていたようである。ただし宣長は『古事記』を始めとする上代の文献では万葉仮名により清音と濁音が書き分けられていたとし(『古事記伝』「仮名之事」など)、弟子の石塚龍麿は師の説を受けて『古言清濁考』(1801年刊)を著した。荒木田久老(享和元年[1801]成立か)『槻の落葉信濃漫録』(『病床漫録』とも)は「歌は雅言を撰むものなれば、音便は上古も今もなきことなり。濁音の音便の訛音にて、清音ならねば、後の歌とても、必清音なるべき証多有べき也。濁音の音便なるは、ふたちやわん、よつばしと濁れども、もとちやわん、ばしと濁る言にはあらず。ちやわん、はし也。しからば濁音にて正音にはあらず。是に準じて余も知るべき也」(小島好治(1939)による。小山正(1956)にも引用あり)として、濁音は「音便」(連濁の意)であり、仮名の乱れは音便が原因で生じたとする。荒木田久老は「上古濁音に正音なし」とする説により、『古言清濁考』の価値を過小評価したのである。荒木田久老には享和元年以前に『古語清濁論弁』があり(小山正(1956)による)、その内容は「古書」の歌には「音便なく、また濁音なき証もあまたあ」とするものである。龍麿は『信濃漫録弁』(『病床漫録弁』とも。小山正(1956)による)を書き「此条大にいにしへにそむきて論者の学問の疎漏さる事、あらはに見えたり。そもそも、濁音の音便なる由は論なし。古書に濁音の仮字を用ひたるは濁りてとなへたるゆゑなるを、歌には音便なしとかたくなに思へるから、古には濁り

て、よまざりしやうに思ひ、まどへるなり」と反論している。平田篤胤（嘉永3年 [1850] 刊）『古史本辭経』の「古言清濁説」もほぼ同様の説で「凡て古語の本は。みな清音なりしことは。始。繼。水などのシキツは古書にも多く。濁音の仮字を用も。今もなべては濁りて云ふめり。言の本を思へば。始は端。繼は付。水は満と<sup>付</sup>同言なれば。甚古くは。清音の言なりしを。後に濁れること知るべし」とする（『新修平田篤胤全集』第七巻による）。鹿持雅澄（1893刊）『言靈徳用』にも「御国の古言に、すべて濁る音すくなく、その濁音は正しき定式ありて、古はみだりに清濁通しいへる例もなく、後世の如くをさをさ誤り唱ることもなく、つゆまぎるゝこともなかりしなれば、その濁音は五十の清音に<sup>付</sup>撰て止ぬるは、謂いあることなるべし」とある。石金音主（1828）『古言本音考』は松本宙（1990）に「本書は、上代語に濁音はなかったとの説を主張するもので、本書より二十七年前の享和元（1801）年刊の石塚龍麿『古言清濁考』の批判として世に問われたものである」と記すように、上代語についても濁音はなかったとする論であるが、本居大平の序を読む限りではさすがに賛同者は多くなかったと考えられる。

伊藤慎吾（1928）『近世国語学史』（立川書店）には「次にまた真淵の所論中の、二つの言葉が対立関係に立つときは濁音がなく従属関係に立つときは濁音が生ずるといふ事、換言すれば連濁音発生の現象は、真淵が言葉に出して之を表はしてはみないけれども、明に濁音が二次的に発生した事を臆気乍らに意識してをつたに相違ない。これは今日学会に於て、ウラルアルタイ語族（Ural-Altai Family）に属する言語にありては濁音は二次的に発生したと唱へられるのと一致する。我日本語がウラルアルタイ語族に属すると主張される理由の一つは、この連濁音の現象が濁音は清音よりも後に発達したといふ事を示すからである」（p.255）、「この語頭に濁音がなかつたといふ事、及び連濁音の現象によつて我上古の音韻組織に於ては濁音は二次的に発生したといふ事を確め得られたのは真淵や宣長の研究が与つて力あることは申すまでもない」とあり、「濁音が二次的に発生した」という説は脈々と受け継がれていることが知られる。現在の日本語研究者は「単純語中の濁音」を認めるのが一般的であり、また日本語のすべての濁音が清音から転じたことを証明することは難しいが、濁音二次的発生説が否定されたというわけでもない。近年の大槻信（1999）・肥爪周二（2003）などの研究は濁音の起源を理論的に連濁（すなわち二次的な濁音）に求めるものであり、新たな「濁音二次的発生説」とも位置づけられる。なお連濁の起源に関する諸説は Timothy J. Vance（1982）にも紹介されている。

ライマン（1885）で連濁の起源について述べた箇所の「東」「右」「左」の語源についての記述は当時の日本人研究者の説であると考えられるので、ライマンは何らかの文献を読んだか、日本人からの情報を得ていたと考えられる。たとえば「右」を意味する「ミギリ」の語源説として山田忠雄（1953）は谷川士清（1830）『倭訓栞』に「みぎり 右をいふ、南面の正位をもていへは右は西にあたり、日の入を見限る義なりといへり」、堀秀根『古言類韻』に「右ミギリ 古説ニ南面シテ日ヲ見際ナリト云」を引用するが、あるいはライマンもこれらに近い説を聞き及んでいたのかもしれない。

## [6] ライマンの連濁研究その後

[6.1] 小倉進平による紹介 ライマン (1894) は1908年に東京大学附属図書館に寄贈され、当時東京大学文学部助教授だった藤岡勝二の手に渡り、さらに藤岡の薦めにより当時助手の小倉進平 (大学院にも在籍、安田敏朗 (1999) による) が抄訳して1910年に『国学院雑誌』に「ライマン氏の連濁論 (上) (下)」として発表された。小倉はそれを1916年に小改稿し、タイトルを「連濁音に就いて」と改めて『朝鮮教育研究会雑誌』第13号に発表、さらに自身の論文集『国語及朝鮮語のため』(1920年 ウツボヤ書籍店) にそのまま収録している。こうしてライマン (1894) はもっぱら小倉進平 (1910)・(1920) によって研究者に知られてゆくのである。

[6.2] 「ライマンの法則」の呼称の定着 ライマンの指摘した非連濁規則の第1則「複合語の後部成素中にすでに濁音がある場合は連濁しない」は連濁研究が盛んになる1970年代において「ライマンの法則」の呼称をもって呼ばれることが定着した。ライマンの連濁研究の日本での受容の過程については鈴木豊 (2005) および別稿 (2007予定) を参照していただきたい。

## [7] おわりに

ライマンは日本の地質学にとってはナウマンとともにその生みの親ともいえる存在であり、北海道開拓を中心として膨大な業績がある。ライマンの日本語研究が「余技」でありながらその研究の水準が高いのは、彼の生まれ育った環境と彼の個性によるところが大きい。また、地質調査に必要とされる綿密な地表調査による埋蔵量の推定という方法も、日本語の連濁研究を実証的にすすめるには有効に働いた。『和英語林集成』の第二版が出版されたこともライマンの研究の質を高めるのに大きな貢献をしていると考えられる。

屋名池誠 (1991) が指摘するように、日本語の連濁現象は日本語のローマ字表記化にとって避けがたい問題であった。連濁の問題は漢字と仮名を使用する日本人には大きな問題として意識されることはないが、清濁を異なる文字で表さなくてはならない (つまり、濁点を使用しない) ローマ字表記においては大きな問題として浮かびあがってくるのである。連濁研究が外国人の手によって開拓されたことには必然性があったのである。

## [文献]

- 伊藤慎吾 (1928) 『近世国語学史』, 立川書店  
大槻信 (1999) 「にぎり」, 『国語国文研究』第112号, pp.51-61 (横組 pp.10-20), 北海道大学国語国文学会  
金田一春彦 (1976) 「連濁の解」, *Sophia Linguistica* II, pp.1-22 ※金田一春彦 (2001) (2005) に再録。  
金田一春彦 (2001) 『日本語音韻音調史の研究』, pp.334-368, 吉川弘文館 ※金田一春彦 (1976) を再録。  
金田一春彦 (2005) 『金田一春彦著作集 第6巻』, 玉川大学出版部 ※金田一春彦 (1976) を採録。  
桑田権平 (1937) 『来曼先生小伝』, 自家版  
小島好治 (1939) 『国語学史』, 刀江書院 ※1970年の復刻版による。

- 小山正 (1956) 『石塚龍麿の研究』 ※1981年の復刻版 (日本佛書センター) による。
- 国語学会編 (1980) 『国語学大辞典』, 東京堂出版
- 佐藤喜代治編 (1977) 『国語学研究事典』, 明治書院
- 鈴木尉元・児玉喜三郎 (1990) 「ライマン・コレクションを訪ねて」, 『地質ニュース』 427, pp.49-53, 地質調査所
- 鈴木豊 (2004) 「『連濁』の呼称が確立するまで—連濁研究前史—」, 『国文学研究』 142, pp.124-134 (横組 pp.11-21), 早稲田大学国文学会
- 鈴木豊 (2005) 「ライマンの法則の例外について—連濁形「一バシゴ (梯子)」を後部成素とする複合語を中心に—」, 『文京学院大学外国語学部 文京学院短期大学紀要』 4, pp.249-265, 文京学院大学総合研究所
- 鈴木豊 (2006) 「近代以降連濁研究文献目録 (1883-2005)」, 『文京学院大学外国語学部 文京学院短期大学紀要』 5, pp.249-265, 文京学院大学総合研究所
- 鈴木豊 (2007予定) 「連濁研究事始め—ライマンの研究の受容について—」
- 肥爪周二 (2003) 「清濁分化と促音・撥音」, 『国語学』 54-2, 縦書 pp.1-14, 国語学会
- 副見恭子 (1990-2006) 「ライマン雑記」 (1)~(21), 『地質ニュース』 427-617, 地質調査所
- 副見恭子 (1995) 「蔵書コレクションが語るライマン」, 『北方圏』 90, pp.42-45, 北方圏センター
- 藤田文子 (1994) 『北海道を開拓したアメリカ人』, 新潮社
- 北海道開拓記念館 (1996) 『ライマン・コレクション展—明治初期の北海道とマサチューセッツ州の交流—』, 第41回特別展目録, 北海道開拓記念館
- 松本宙 (1990) 「〔資料複製〕石金音主『古言本音考』」, 『国語論究 第2集 文字・音韻の研究』, pp.407-487, 明治書院
- 森本貞子 (2003) 『秋霖符 森有礼とその妻』, 東京書籍
- 安田敏朗 (1999) 『言語』の構築 小倉進平と植民地朝鮮』, 三元社
- 屋名池誠 (1991) 「〈ライマン氏の連濁論〉原論文とその著者について 付.連濁論原論文「日本語の連濁」全訳」, 『百舌鳥国文』 11, 横組 pp.1-63, 大阪女子大学大学院国語国文学専攻院生の会
- 山田忠雄 (1953) 「ミギとミギリ」, 『金田一博士古希記念 言語・民俗論叢』, pp.715-752, 三省堂
- Fumiko Fujita (1994) *AMERICAN PIONEERS and the JAPANESE FRONTIER: American Experts in Nineteenth-Century Japan*, GREENWODS PRESS
- Gonpei Kuwata (1937) *Biography of Benjamin Smith Lyman*
- Timothy J. Vance (1982) On the Origin of Voicing Alternation in Japanese Consonants, *Journal of the American Oriental Society*, 102-2, pp.333-341, American Oriental Society

(注)

- (1) in が衍字であるとの御教示を, 文京学院大学外国語学部教授 John N. Wendel 氏より受けた。ここに記して御礼申し上げます。